

四 泣くも笑ふも慾ゆるに

人間に欲のないものはありません。いつも欲と二人連で働いて居ます。けれどその欲が程度を越してはなりません。正欲はよいとしても、邪欲は却つて身を亡ぼします。従つて儉約と吝嗇とは能く間違へられるものです。いくら儉約をするくと云つたとて。腹さへ突張れば充分とあつて、滋養をとらないで、身體を弱らせ、病氣になつても薬を吞まないで、氣張つて居るのは少しキ印に近いのであります。出すべき筈の處には出すが、其代り出すべからざる處には出さぬと心掛け、浪費を慎むと共に正費は果さねばなりません。西洋に至つて吝嗇家がありました。「どうも俺はまだく修行が足りない聞けば都には仲々先輩が居るさうな、一つ習つて來う」と出かけて、漸くその家を尋ね當てた。來意を告ぐれば、先生大喜に喜んで「それはくよくこそお出下さつた、遠方の道を。御飯はまだでせう、何か御馳走を差上げた、云何です、散歩旁、一緒に町へ食ひに参りませう」。「それでは」と二人で出かけたものゝ、さて案内、聞いたにも似ぬ開けた無欲の人だ、最初から御馳走をすると云ふ、是では頼み甲斐もないかな」と思ひくついて行くと、先生先づパン屋の前に立つた「オイ、上等の軟らかいパンがあるかい」。「へい、軟かい上等の全然バターのやうなのがございます」。「フンして見ると、パンよりバターの方が上等らしい、ドレドレ、バター屋へ行きませう」。去つてバター屋へ行つた「オイ、上等のバターがあるか」、「ハイ、丁度橄欖油のやうな上等がございます」。「ハア左様かい、油のやうなのがある、すれば油の方が上等だな、よしく油を御馳走しやう」と、今度は油屋へ行つて「オイ、上等の油はないか」。「ハイ、水のやうな澄み徹つた極上等を差上げませう」。「何ぢや、水のやうな上等を……、すれば水が一番上等らしい、水

ならば幸、私の家に澤山取寄せてある」と、直様な家に歸つて、コップ一杯に水を盛つて「これはほんに水のやうな水にござる、たんと召食れ」と。水ばかり飲ませたさうだ。田舎の吝嗇家、熟々感心して「成程見上げたものだからもお陰で大層智慧を得ました」と厚く禮を述べて歸つたとか。こんな我利我利者では困る。欲のために心が汚れて仕舞つてはなるまい。

相當の財産が出来たで、少しは氣のきいた交際もしやうと、心では思つても、吝嗇な細君を納得させることが出来ず、云何か濟度して下さいと願ひ出た日置黙仙和尚の檀家があつたと云ふ。黙仙和尚も承諾はしたものの、是には一寸困つた。まさかに吝嗇で不可ぬと怒鳴る譯にも行かず。と云つて仕方がなく、出かけて行つた。一間に通され、主夫婦に挨拶が濟んで。和尚いきなり握つた拳を、ニューとばかり奥さんの前に突出し、抜からぬ顔で「若し此の拳が始終斯うなつて居たら云何でせう」。「それは不具です」と細君が答へる。「成程、これは不具で、丁度摺子木の看板みたやうなもの、何の役にも立たぬ、それなら、是が始終斯うであつたら云何か」と、今度は五指を開いて差出す。細君不思議な顔つきで「それは矢張り不具であります」。言終らぬに和尚すかさず「左様、是は矢張り不具である、それだから五指握りづめで、轉んでも只是起きないと云ふも悪い、又始終開き放しでも不可ない……」と説き出すと、主人、時こそと横合から「喃、これ菩提寺の和尚さんも、彼様仰しやるのだから、これからはまあ、これ位にしてなア」と、五指を半ば開いて示し、一同思はず大笑ひに終つたとある。

握りづめも困るが、開きづめも困る。握りつ開きつ、貪らず捨てず、常に其の心を清らかに保ちたい。